

おかやさんの伊勢参り

黒沢の村はずれに榧（かや）の木が立っている。樹齢200年ともいわれるこの木の実はカリツとして香ばしく、ナッツのようにおいしい。その材木は固くて、油が強く、碁盤や将棋盤として使われる。杉や松と同じ針葉樹で、その枝は生のまま火に入れると煙がたち、蚊が近寄ってこない。蚊を遠くにやって近づけないことを「蚊やり」といい、それが榧の木の語源となったという。



ある年の夏、いつもなら榧の実が大きくふくらんでくるころなのだが、いつになっても茶色くて小さいまま。村人たちは不思議に思っていた。ようやく榧の実が色づいたのは3か月近くもあと、もう雪が降る直前だった。

翌年、村人五人がはるか遠く、お伊勢参りに出かけた。その頃は、歩いての旅だから黒沢村から伊勢までは、1か月もかかる。長旅を終えて、宿にたどりつき、宿帳をつけていたところ、番頭から声をかけられた。

「黒沢村からですか。これはこれは長旅ほんにご苦労様でした。実は、去年の夏、黒沢村から」おかやさん」という方がお見えになりましたね。えー、えー

齡は20代後半ぐらいですか。それはそれはべっぴんさんで、女一人で来られたというんでびっくりしたんですよ」  
村人たちは、首をかしげた。

「おかやなんておなご衆、黒沢にいたつげが」

その場はそれで済んだが、長旅の疲れをいやそうと夕飯で一杯ひっかけながら、話はずんだ。



「番頭さん、黒沢からおかやという女の人 came と言っただな」

「いや、そんな名前のおなごはいねえぞ」

「しかも、そんなめんごい女なら、知らないわけないもんな」

儀太郎という男が、口を開いた。

「おかや、というおなごはいないが、榎の木はある。あの木が、おなごに化身して伊勢参りに来たんでねが？」

「そういえば、榎の木今年は実がなるのが遅かったな」

「3か月ぐらい遅れたんでねが」

儀太郎が続ける。

「黒沢村から女の足でお伊勢参りに来たら、3ヶ月近くかかるな」

「んだ、んだ、おかやさんは、榎の木に違いねえ」

村人たちの考えは一致した。そして、村に帰ってその話をした。

数年後、榎の木のそばの民家が火事になった。しかし、すぐそばにあった榎の木に奇跡的に燃え移らず、焼けずにすんだ。また、この木が村人たちによって切られようとしたとき「おかやさんに何をするんだ」という者が現れ、切り倒されずにすんだ。これはお伊勢参りの功德だろう言い伝えられている。